

氏名(本籍)	あ べ じ ろう 阿 部 二 郎 (東京都)		
学位の種類	博 士 (言語学)		
学位記番号	博 乙 第 2015 号		
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	現代日本語における引用句の諸相 - 引用句内の構造を中心に -		
主査	筑波大学教授		砂 川 有里子
副査	筑波大学教授	博士(文学)	湯 沢 質 幸
副査	筑波大学助教授		杉 本 武
副査	筑波大学助教授	Ph. D.	竹 沢 幸 一
副査	筑波大学助教授	文学博士	廣 瀬 幸 生

論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は、現代日本語において「～ト(言う/思う)」の形で表される引用句について、統語論および意味論の観点から考察するものである。具体的には、個別の現象の観察・記述を通して、引用句が日本語の文法体系の中で果たす役割と位置づけを明らかにするとともに、引用句以外の文法現象から得られる知見に照らして引用句の性質を明らかにすることを目的とする。

本論文の構成は以下の通りである。

第 1 章 序論

(目的と意義/引用句の規定/先行研究と問題の提示/文の階層構造)

第 2 章 「ハ」と「ガ」を通して見た引用句

第 3 章 認識動詞構文に現れる引用句 - 「XガAヲBダトV」-

第 4 章 名詞を受ける「ト」 - 「XガAヲBトV」-

第 5 章 主題を持たない引用句について

第 6 章 結論

第 1 章では本研究の枠組みと課題が示される。まず、「引用句」を、引用の「ト」を伴う連用成分として文内に生起する句であると規定し、以下のタイプに分類する。

- 1) 「[～ハ～ダ]ト」のタイプ
- 2) 「[～ガ～ダ]ト」のタイプ
- 3) 「～ヲ～ダト」のタイプ
- 4) 「～ヲ～ト」のタイプ

さらに、異なったタイプでありながら、類似の意味を表す場合として次の事例が示される。

・「[～ハ～ダ]ト」と「[～ガ～ダ]ト」

太郎はクジラは魚類だと言った。

太郎はクジラが魚類だと言った。

・「[～ガ～ダ]ト」と「～ヲ～ダト」

太郎は花子が女優だと思こんでいる。

太郎は花子を女優だと思こんでいる。

・「～ヲ～ダト」と「～ヲ～ト」

村のみんなは彼を英雄だと信じている。

村のみんなは彼を英雄と信じている。

以上を論じた上で、筆者は本研究の課題として以下の2点を提示する。

I) 本来は他者の言を完全な形で再現する引用句が、文としては不完全なものを内容に取ることがある。この場合、引用句内の文は具体的に何が「不完全」なのか。

また、引用句が「不完全な文」を内容にとる要因は何か。

II) あるタイプの引用句が、別のタイプの引用句と表面上類似している場合、それらの違いは何か。そして、なぜそのような複数の表現が存在するのか。

第2章では、引用句内において主題を表す「ハ」がいわゆる中立叙述の「ガ」に交替可能な場合が存在するという現象を扱い、「ハ」の現れる引用句内には真性モダリティが存在するのに対し、「ガ」の現れる引用句内にはそれが存在しないという結論を導いている。すなわち主題の出現条件と文の階層構造を検討し、引用句に、引用元の発話の場における「私・今・ここ」が存在するタイプとそれが存在しないタイプがあるとするのである。このことから引用句には南不二男の階層分類におけるC類以上に属するものとB類に属するものがあることが示される。

第3章では、「認識動詞構文」のうち「(Xガ)AヲBダトV」という構文について考察する。この構文を「(Xガ)AガBダトV」の形をとるいわゆる「引用構文」と対比させ、格付与と語順の観点から両構文の違いを明らかにする。すなわち、認識動詞構文は引用構文が選択する補文とは異なるタイプの補文である小節を選択する構文であり、引用構文を基底として派生されるものではないこと、さらにこのことを踏まえて、認識動詞構文が引用構文よりも中核的な階層に位置づけられるものであることを主張する。

第4章では、第3章で扱った「(Xガ)AヲBダトV」という形の認識動詞構文によく似た「(Xガ)AヲBトV」という構文について考察する。ここでも格付与とモデルや意味の差異が検討され、「(Xガ)AヲBトV」における引用句には時制・極性・モダリティが現れないという点で、「(Xガ)AヲBダトV」と異なり、「(Xガ)AヲBトV」の引用句がA類に属するタイプであることが主張される。

第5章は、引用句に主題の「ハ」が現れるタイプと中立叙述の「ガ」が現れるタイプを取り上げ、それぞれの意味の差異を詳しく記述することによって、「ハ」と「ガ」の選択に意味論的な要因で説明できる場合と、語用論的な要因によらなければ説明できない場合のあることが明らかにされる。

第6章は、これまでの議論の総括として引用句の各タイプと階層モデルとの対応関係が整理して示された後に、典型的な引用句から逸脱したタイプの引用句の特徴をまとめ、この種の引用句が「所与性」「非介入性」という典型的な引用句の特徴を保ちつつも「独立性」「忠実性」に欠けるという点で典型から逸脱するものであると主張する。その上で、今後に残された問題と研究の展望が示される。

審 査 の 結 果 の 要 旨

日本語の引用句研究は話法の研究という観点から「直接引用」と「間接引用」という2種のタイプに分けられて記述されることが多い。本研究はそのような二分法では記述できない問題があることに着目し、形式的に異なる4つのタイプの引用句が、それぞれ文の階層構造の異なったレベルに位置づけられるもので

あること、および、各々のタイプが統語構造の異なりに応じた異なった意味を表すものであることを論じている。本研究の意義は、これまで個々別々に論じられてきた引用句のさまざまなタイプが、文の階層構造という体系の中で各階層に位置づけられることを示した点にある。このように、本研究は従来の話法研究で捉えきれなかった統語構造と意味の異なりを統一的な観点から体系的に記述しようとした独創的かつ有意義な研究である。

本研究の独創性としてあげられるもう一つの点は、非典型的な引用句という従来あまり研究が進められていなかった領域にスポットを当て、それを引用句全体の体系の中で位置づけようとした点にある。非典型的な引用句を典型的な引用句と比較し、両者が共通の特徴を持ちながら、異なった特徴を持つものであることを、統語論の観点だけでなく、意味論や語用論の観点からも切り込み、指示の透明性、既定的前提、引用動詞の意味体系といった種々の要因に着目した丹念な用例分析を行うことによって説得力のある形で示し得たところに本研究の意義がある。

本研究は引用句にコピュラ文を取る構造を中心として論じられたものであり、動詞述語文にかかわる議論そのものは十分でない。動詞述語文を取る引用句も含めた引用句全体に通じる問題はいくつか提起されているが、具体的な議論は今後の課題として残されている。しかし、認識動詞構文といわゆる引用構文との統語的・意味的な差異を記述し、種々の引用句を文の階層構造という体系に位置づけるという本研究の目的は果たされており、本論文は学位論文として十分に完成された論文であると認められる。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。